小鹿田窯への懸念

柳宗悦

青空文庫

誰にも読めぬ大分県日田の皿山たる小鹿田（おんだ）の地名が、今では多くの方々の口に上るまでに至った。つい三十年前には山間に深く隠れて、車も通わぬ無名のこの窯場が、今や内地のみではなく世界からも客を集めて、小型でもバスまでが日々通うに至った。

しかし皮肉なことに、かかる急変が漸次この窯に幾多の危機を招くに至ったのを残念に感じる。今や窯を毒する様々な外敵が迫ってくるからである。実はその責任の一半は、この窯を広く世に紹介した私の双肩（そうけん）にかかるので、考えあぐんでいる次第である。

窯への害毒の第一は、茶人や何も分らぬ客たちの無理解な色々の注文であり、第二は利得を忘れぬ人間どもの度々の介入である。出来得るなら、この大切な窯の正しい味方となって頂きたいといつも心に念じる。私は最初この窯の価値に対して熱心な味方となった者であるが、今ではむしろその外敵と戦うはめに至った事を残念に考える。讃美者よりも、実は贔屓（ひいき）の引き倒しの方に害がかえって多く、また今では利得主義の人々がなおもこの窯の外敵なのを覚えるのである。これは果して私の単なる杞憂（きゆう）に過ぎないであろうか。

追伸、以上は『大分合同新聞』からの依頼で、本年の正月に寄稿した一文で、その折の対象は日田の小鹿田窯であったが、実は全く同じ事がその兄弟窯たる小石原窯に対してもいえるのである。否、小石原の方が福岡のような都市と、一日に何往復かのバスが通うので、その危険は小鹿田窯よりも更に近く迫っているともいえよう。特に利得を忘れない注文主の介入によっ

て、民窯への無理解な買入れが続くことほど恐ろしい事はなく、地元の人たちには大いに反省する必要が起ってこよう。土地の醇朴な陶工たちが金銭で恩を売る買手の甘言に、迷わされては気の毒の至りではないか。小石原は今こそ、その歴史の曲り角に立っているのを自覚しているであろうか。ここでも他の窯々と同じく、浅い趣味の茶人たちや利己的な商人の介入ほどこの窯に毒を流すものはあるまい。近来右の弊害が余りにも目立って来たので、ここに九州での大会を機会に苦言を呈する次第である。要は貴い窯の伝統を今後も乱さないようにお希いして止まない。これらの私の懸念は、果して単なる杞憂に過ぎないであろうか。

ではどうしたら小鹿田や小石原の窯を正しく発展さす事が出来るのか。

第一に必要な根本条件は、これらの窯々が持つ伝統のよさを美しさの上から正しく理解し得る人を見出して協力を求める事である。これがないと、幾ら金銭的に保護されても、ますます品物が悪くなる危険が迫ろう。かかる貴重な窯では、常に質を量の上に置くべきである。世界に見られる一つの好適例を挙げよう。蘇国の沖に小さな孤島の「セント・キルダ」がある。この孤島で立派な手織の毛織物が長らく生産されて、世界的な名声を博した。注文は殺到するが、悲しい事に狭く小さいこの島で飼い得る羊の頭数には限度がある。また工人を大勢この小島に入れるわけにもゆかぬ。それで島民は賢明にも、多くの注文を断って、在来の格を固く保持する道を選んで、決して多くの量には手を出さず、また質を落とす事も決してしなかった。ところがこの格を守る運動こそは大きな結果を齎らして、約三カ年前からの予約でなくば購え

ないほどになって、この少量の毛織物の声価をいやが上にも確実に高めた。これがこの島の経済を守護するに至って、島の生活は大変向上するに至った。この結果は全く質を保って格を少しも落とさない事から来る異常な繁栄であった。

これはわずかな一例に過ぎないが、私は量よりも質が二つの窯場の運命を決するのを信じて疑わない。ただ私の長年の経験では、これらの窯に度々行き得る協力者を得る事が、大変に必要なのである。彼が美の理解者たるべき事は、前述のように第一の根本的な資格であるが、第二には特に民藝の美に深い尊敬を持つ技術者（陶工）であるなら、事情は一層よいに違いない。しかし県の陶磁器研究所などに協力を求めるのは、非常に危険なのである。官の役所はそんなに親身になって世話はしてくれない。しかも若い技師などに係（かかわ）るのは禁物であろう。伝統を破壊する事に、新しさがあると考える者が多いからである。それに私はかつて彼らから民窯への尊敬の言葉を聞いたためしがなかった。私が金銭でこの窯を支配しようとする人を避けたいのは、彼らが決して真の意味での味方ではなく、むしろ質を落とさす恐るべき誘因となるからである。

今日スイスやスエーデンで、伝統の仕事が栄えているのは決して国家官僚の役人たちの守護があるためではなく、国民全体に国の正しい伝統を守ろうとする気運が高まっているからに依る。これは国家の保護よりも、どんなに根本的な鼓舞であるか分らない。

青空文庫情報

底本：「柳宗悦　民藝紀行」岩波文庫、岩波書店
　1986（昭和61）年10月16日第1刷発行
　2012（平成24）年6月15日第9刷発行
底本の親本：「柳宗悦全集著作篇第十二巻」筑摩書房
　1982（昭和57）年1月5日初版発行
初出：「民藝　第百一号」
　1961（昭和36）年5月1日発行
入力：門田裕志
校正：木下聡
2018年11月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小鹿田窯への懸念

柳宗悦

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/